

# C. K. ドージャーの使命と理想（下）

堤 ともみ

## はじめに

キリスト教の宣教師として伝道を目的に来日したC. K. ドージャー (Charles Kelsey Dozier, 1879-1933) は、1916年に西南学院を設立し教育に携わった。

前号において、ドージャーの手紙と論説を取り上げた。その中で、遺訓「キリストに忠実なれ」とは、ドージャーが西南学院関係者へ託した思いであると同時に、自らの生きる指針であった事実を明らかにした。「キリストに忠実なれ」という生き方が西南学院創立という使命を生み、彼の理想を教育の中に結実させたのである。

そこで今回は、彼の生涯を概観して、「キリストに忠実なれ」という遺訓に込められたメッセージを考察した上で、彼の理想が西南学院の教育の中にどのように生きているかを明らかにしたい。

## 第1章 ドージャーの使命

### 第1節 人格形成と信仰の土台 — 日本宣教まで —

ドージャーは、1879（明治12）年1月1日に、アメリカ南東部ジョージア州に3兄弟の末っ子として生まれた。彼の家系は曾祖父母の代にフランスから宗教的迫害を逃れて移住してきたユグノー教徒<sup>1</sup>であり、父は長老派に、母親はバプテスト教会に属する敬虔な家庭であった<sup>2</sup>。彼が福音宣教への神の導きを確信するようになったのは18歳頃である<sup>3</sup>。

ドージャーの幼少年期は、キリスト教信仰の基礎を形成する時期であった。祖先から受け継がれ家庭の中に育まれていた信仰に対する姿勢が彼の生育環境となり、自然で深いキリスト教信仰の素養となった。

ドージャーが伝道者となることを決意した頃、家庭が父親の病氣と会社の破産によ

---

1 ユグノー (Huguenots) はフランスにおけるプロテスタントの総称である。

2 西南学院学院史編集室『C. K. ドージャーの生涯』西南学院、1979年、4頁を参照。

3 西南学院編集『SEINAN SPIRIT : C. K. ドージャー夫妻の生涯』西南学院、1996年、3頁を参照。

り経済的な危機に陥った。そのような中、兄と叔母の援助に支えられ、20歳でバプテスト派のマーサー大学 (Mercer University)<sup>4</sup>へ入学。卒業後、宣教師になるため南部バプテスト神学校 (Southern Baptist Theological Seminary)<sup>5</sup>へ入学した。

ドージャーの青年期は神への忠実な思いが明確になった時期である。家庭の経済的危機は乗り越えるべき試練となり、信仰が試されると同時に伝道者としての夢を明確なものにした。また願いの強さ故に、兄や叔母といった支援者が現れた。困難を乗り越える時には人的なネットワークを構築するコミュニケーション力が不可欠であるが、青年期に直面した試練によって周りの人たちの支援を受けながらも、自分が成すべき課題を確実に行う態度が身に付いたと推察できる。家庭の経済的危機は精神的自立を促し、苦難を乗り越える強い精神力を形成したと考えられる。

神への思いが明確になったドージャーは、海外伝道の夢を持つようになった。そして、彼の生涯における重要な2つの出会いを得る。1つは伴侶となるモード・A. パーク (Maude Adelia Burke, 1881-1972) との出会いであり、あと1つは伝道の地日本との出会いである。こうしてドージャーは貴重な出会いを通して人格を形成し、信仰を土台として日本での伝道へと向かった。



ドージャーは来日の4カ月前に結婚式を挙げた  
(1906年6月6日)

- 
- 4 ジョージア州メーコン (Macon) にあるマーサー大学は伝道者養成のため設立された神学校であったが、1837 (天保8) 年に総合大学として認可を受けた名門校である。
- 5 ケンタッキー州レイヴイル (Louisville) にあった。

## 第2節 伝道から教育へー西南学院創立までー

伝道を目的に日本に向かったドージャーであるが、日本では教育者としてキリスト教学校である西南学院創立に尽力する。

ドージャー夫妻が訪れた明治期は、日本が急激な近代化を推し進めた時代であり、キリスト教は進んだ欧米文化や生活様式を伴うかたちで入ってきた。しかし、キリスト教への偏見は強く、言葉や生活習慣の違いも大きく開拓伝道は非常に困難であった。宣教師の中には挫折して帰国する者もいたが、ドージャーは気取りのない人柄であり「話のわかる耶穌のお坊さん」として受け入れられた<sup>6</sup>。

このような中、欧米ミッション<sup>7</sup>が伝道活動とともに学校創立による教育事業に力を注ぐようになり、ドージャーも南部バプテスト派遣宣教師として学校創立に関心を抱くようになった。南部バプテストは九州伝道を1892（明治25）年に始め、熊本・長崎・鹿児島などに教会を設立した。その後、在日宣教師社団によって1907（明治40）年に福岡バプテスト神学校<sup>8</sup>、1911（明治44）年に福岡バプテスト夜学校を創立し、ドージャーが校長となってキリスト教信仰を土台とした教育を実践した<sup>9</sup>。

福岡バプテスト神学校から福岡バプテスト夜学校への移行には、伝道活動から教育活動へ向かうステップが見出される。神学校では伝道の専門家を養成する。キリスト教学校では、人格の育成をキリスト教が担い一般の学問を学ぶ。伝道から教育への移行というステップを経る中で、ドージャーたちの並々ならぬ働きかけに対して、ボードから男子中学校創立の許可が下り、西南学院創立の運びとなる<sup>10</sup>。

ドージャー来日から西南学院の創立までの時期は、歴史を生き抜く学校にするために、時代の風を上手く呼び寄せたドージャーの力量が存分に発揮された。ドージャーの前には異文化である日本社会への適応、創立のための資金の獲得、土地の入手等、具体的な問題が山積していた。創立許可および資金獲得のために祈る中で、ボードに大きな基金が設立され、それが充てられる幸運を得た。学院の創立と永続にとって最適といえる土地を手に入れる幸運も得た。そこには信仰者の祈りがあった。ドージャー

---

6 西南学院編集、前掲書、12頁を参照。

7 海外宣教師団を指す。

8 資金難や南北バプテストの合併等の理由で閉校となった。西南学院編集『SEINAN SPIRIT：C. K. ドージャー夫妻の生涯』西南学院、1996年、17頁を参照。

9 在日宣教師社団は福岡バプテスト夜学校に満足しなかった。ドージャーもボードに対して何度も昼間の学校設立を願った。西南学院編集、前掲書、18頁を参照。

10 ミッション・ボードの「ジャドソン伝道開始百年記念基金」の一部が日本の伝道と教育にも充てられ、資金的な目途がついたことも大きな要因である。これは、A. ジャドソン（Adoniram Judson, 1788-1850）の外国伝道100年を記念して設立された基金である。西南学院編集、前掲書、23頁を参照。

ジャーは信仰を土台としてその時々によすべきことを行なった。彼の目指したのはあくまでも伝道であった。そのために見出した最善の策がキリスト教学校の創立であった。

## 第2章 ドージャーの理想

### 第1節 西南学院の礎

西南学院創立からドージャーが亡くなるまでを西南学院の礎の形成期として位置づけ、その礎が何であるのかを確認する。また建学の精神「キリストに忠実なれ」がどのようにして生まれたか、またこれに込めた彼のメッセージを考察したい。

ドージャーは西南学院の開設に向け土地購入や資金獲得等に多忙な日々を送ったが、1916（大正5）年4月11日に「私立西南学院」を教師9人、生徒104人で福岡市大名に開校した。「西南学院」という名称は仙台の東北学院と神戸の関西学院に対し、日本のキリスト教教育を分担するという雄大な理想をもって命名した<sup>11</sup>。

ドージャーは本来日本人の学校は日本人が運営するべきだと考え、初代院長には條猪之彦が就任した。しかし條が程なく病氣療養のために辞任し、1917（大正6）年にドージャーが38歳で第2代院長となり、13年間その責務を果たすことになる<sup>12</sup>。旧制中学部に加え1921（大正10）年には高等学部（文科、商科）、1923（大正12）年には神学科が増設され、西南学院の伝統を構成する3学科が創設された。神学科が精神的支柱となり、文科が英語力という地域を超え国際的に活躍する力量を育み、商科が地域に根ざしたニーズを満たす役割を担った。

その後院長在任中に起こったのが「日曜日問題」である。ドージャーはキリストに忠実であるために、聖書に忠実な信仰を持っていた。日曜日を安息日として守らせようとするドージャーと、日本社会でそれを守るのが難しい学生との対立が生じていった<sup>13</sup>。彼は日曜日問題のただ中でも常に神に祈り、「キリストに忠実」であり続けた。しかし、問題の責任を痛感し体調への配慮もあり、ついに彼は1929（昭和4）年4月に院長を辞任した。

日曜日問題はさまざまな問題を提起した。「キリストに忠実」とはどういうことなのか。キリスト教と異文化である日本社会との衝突であり、信仰と現実の生活との軋轢であった。日曜日問題のただ中で、ドージャーは「天の父よ…私たちが、一生を送

---

11 日本バプテスト連盟歴史編纂委員会編『日本バプテスト連盟史（1889-1959）』日本バプテスト連盟、1959年、179頁を参照。

12 西南学院編集『SEINAN SPIRIT：C.K.ドージャー夫妻の生涯』西南学院、1996年、28頁を参照。

る場所として、日本を選びましたのは、決して、安逸を求め快樂を得るためではありませんでした。私たちは、日本国民のために命を捧げるように、あなたの導きを感じたのでした。…神よ、あなたの僕にあなたのみ心を今お示し下さい」<sup>14</sup>と神に祈り答えを求めている。しかし結果的には、学生による院長排斥ストライキへ繋がり、最終的に院長職の辞任となった。彼にとって日曜日問題は、信仰を試され院長の辞職に追い込まれ、命さえ縮ませかねない要因になった。しかし彼のキリストに忠実である態度は、学院関係者の心に深く刻まれ語り継がれている。

院長を辞任したドージャーは休暇で1年間帰米した後、1931（昭和6）年に北九州の西南女学院校内の宣教師住宅に移って教会の活動等に従事した。その頃から健康状態が悪化し、狭心症による心臓発作が起こるようになる。そして1933（昭和8）年5月31日、54歳の生涯を閉じたのである。彼は亡くなる前に夫人に、何度も「私の人生は不完全なものだった。しかし私は全力を尽くした。私は神に救われた1人の罪人でしかない」と言い、「自分の命より愛した西南学院よ、いつまでもキリストに忠実であってくれ」と西南学院に伝えて欲しいと遺言したという。ドージャーが臨終に際して遺した「西南よ、キリストに忠実なれ（Seinan, be true to Christ.）」は、建学の精神として受け継がれ、西南学院の精神的礎となっている<sup>15</sup>。



西南の森に静かに眠るドージャー夫妻

13 昭和初期頃には野球部を始めとするスポーツクラブが盛んになり、日曜日に行われる対抗試合が多かった。運動系の部活動だけでなく音楽会や講演会等文化系サークルに対しても、日曜日の活動を禁止した彼の厳しい方針に、当初は従っていた学生から徐々に不満が昂じ、学生に同情する教師も現れた。そのような中1928（昭和3）年1月、ドージャーは学生に同情し学校の教育方針に合わない教師を罷免した。それが引き金になり、学生のドージャーに対する院長排斥ストライキへと発展した。1928（昭和3）年7月に野球部が全国高専野球西部予選大会に進出し、試合は日曜日に行われた。学生はドージャーに内緒で出場し勝利を収め、それを知ったドージャーは野球部の学生を無期停学処分とし、準々決勝戦出場も禁じた。もし出場すれば全員退学処分にするというドージャーの厳しい態度に、野球部員は激昂したが、結局は出場を断念した。そのような状況に学院内外から学生に同情する声が高まった。西南学院編集、前掲書、47～51頁を参照。

14 1927（昭和2）年2月13日日記より引用。西南学院編集、前掲書、49頁を参照。

ドージャーの生涯を見ると、54年という1人の人間の歳月が、精神的豊かさによって百年をも生き抜く教育理念を創造したことがわかる。一方でドージャーの人物を見ると、完璧な人格者であったとは必ずしも言えない。情が深く、時に衝突する人間くさいドージャーである。しかし、キリスト教信仰が彼の豊かさを育んだ。信仰に忠実であるとは人生に真剣に挑むことであった。彼がこれほど忠実でなかったら、百年を生き抜く西南学院の礎を築き得なかったであろう。本来、建学の精神は創始に際してアピールされる。だが彼が激しいほどにキリストに忠実であったから、「キリストに忠実なれ」という遺訓が、建学の精神として受け継がれることになったのであろう。

## 第2節 教育の理想

ドージャーの生涯は、「キリストに忠実」な生涯であった。その生き方が、西南学院の礎を築いた。また、前号において手紙や論説から分析したとおり、彼の「キリストに忠実」な生き方が西南学院創立という使命と教育の理想を生んだ。伝道のために来日した彼が、教育に生涯を捧げたのである。

そこで、まずドージャーにおける伝道と教育の関係を考察したい。ドージャーは、「理想」(校友会雑誌第7号、1923年)において教育における3つのステップを明示した。第1段階は、高い理想を抱きそれに近づくよう努めること。第2段階は、真実を求めること。第3段階は、理想となる真実な存在イエス・キリストに習うことだった。

一般的に、第1、第2段階の理想・真実に向かって成長する過程を重視するのが教育であり、第3段階のイエス・キリストの福音を伝えることを重視するのが伝道だと捉えられる。ところが彼のキリスト教教育には、第1段階から第3段階全てが必要であった。つまり教育と伝道の両側面が必要であった。

ここで、ドージャーの立場を明確にする。彼が日本にやってきたのは、神の国キリストの福音を伝えるためであった。つまり伝道のためであった。しかし、学校を創立し教育に携わることになる。彼にとって教育は、神を伝えるため、つまり伝道の有効な手段であった。伝道と教育は別のものでなく一体であるべきであった。教育の3つのステップの全てが彼には大切であった。信仰の種蒔きを重視する伝道と、それを根付かせ育てる成長過程を重視する教育の両方が必要であった。伝道で蒔いた種は、教育によって深く根を張り光を求め逞しく伸びる。個人の成長に加え、伝道のために必要な人材育成も可能になる。

改めてドージャーの「キリストに忠実なれ」という遺訓を、教育の視点から捉え、西南学院に対して持つ意味を考察したい。キリスト教主義ではない一般教育の場合には、3ステップの第1段階、第2段階を重視し、高い理想を抱き実現のために努力なさい、と教えるであろう。しかし、彼はそれだけでは満足しなかった。第3段階における、真実なキリストに習いなさい、というのが最も伝えたい内容であり、それが欠ければドージャーの言う教育は成り立ち得なかったからである。つまり彼の「キリストに忠実なれ」という建学の教えは、キリストが全ての出発点である。校訓として誠実、努力、勤勉等々の高い理想を掲げることも可能ではあるが、彼にとって「キリストに」がなければ教育は成り立たなかった。逆に、「キリストに」がありそれに忠実であれば、それに伴う良い性質は自ずと備わってくる。

キリストは多くのことを教え示している。教えの1つを建学の精神とするのではなく、教えの源であるキリストに忠実な態度をドージャーは求める。全ての源となるキリストを仰ぎ繋がっていれば、必要な全てが与えられ理想に近づくと言う。

しかし、キリストを知らないと意味がない言葉でもある。どのような良い性質を持っているのかを知らないと、忠実でありようがない。そこで、聖書に学びキリストをよく知ることが建学の精神を活かすスタートになるとドージャーは言う。「キリストに忠実なれ」という建学の精神は、西南学院に学ぶ者に対して神との出会いを願うドージャーの語りかけだといえよう。語りかけに応答するかどうかは強制されるものではなく、それぞれの意志に任せられている。しかし、その語りかけを自らへの直接の語りかけとして捉えるとき、その持つ意味は違ったものとなるだろう。

#### 〈著書〉

C. K. ドージャー (1925) 『日毎の糧』 発行所不明

C. K. ドージャー (発行年不明) 『我等の標準』 発行所不明

#### 〈参考文献〉

故ドージャー院長記念事業出版委員会編 (1934) 『ドージャー院長の面影』 西南学院

C. K. ドージャー夫人 (1959) 『ふるさとへの道』 ヨルダン社

日本バプテスト連盟歴史編纂委員会編 (1959) 『日本バプテスト連盟史 (1889-1959)』 日本バプテスト連盟

西南学院学院史編集室編 (1979) 『西南学院の創設者 C. K. ドージャーの生涯－生誕100年記念－』 西南学院

西南学院学院史企画委員会編 (1986) 『西南学院七十年史上・下巻』 西南学院

Parker, F. Calvin, 1991, *The Southern Baptist Mission in Japan 1889-1989*: Lanham, Maryland: University Press of America

西南学院広報・調査課編 (1996) 『Seinan Spirit－C. K. ドージャー夫妻の生涯－西南学院創立80周年記念－』 西南学院

- 枝光泉（2001）『宣教の先駆者たち』ヨルダン社
- C. K. ドージャー夫人著瀬戸毅義訳（2002）『日本の C. K. ドージャー：西南の創立者』瀬戸毅義
- 関東学院大学キリスト教と文化研究所バプテスト研究プロジェクト編（2007）『バプテストの歴史的貢献』関東学院大学出版会